

この舞台を観た時、あることが私の中でひっかかった。舞台がほぼ赤・青・白の3色で成り立っているのだ。現実の世界を忠実に再現したならば、ここまで偏った色使いにはならないだろう。このことから私は、「色が特別な演出に使われているのではないか」という仮説を立て、再び「ルチア」を見直してみた。すると、この舞台において色は登場人物の立ち位置、特にどの家に属しているのかを示す役割を果たしているということが分かった。

例えば、ルチアの兄であるエンリーコ・アストンは始終青色の服を着ており、腹心であるノルマンノの服も青色である。このことから青色は、舞台におけるアストン家を表現していることが分かる。このため、第2部の結婚契約書にサインをする場面では、後ろの合唱隊が青のライトで照らされている。対するエドガルド・レーヴェンスウッドは赤色の服を着ており、第2部第3場でてくる祖先の墓も赤色をしていることからレーヴェンスウッド家には赤色が振り当てられていることがわかる。そして最後に、ルチアの結婚相手であったアルトゥーロ・バックロー卿は従者と共に輝く白色をまとっており、白色がバックロー家の色だということが窺える。

このように登場人物が身につけている色はその人物の所属を表している。そのため、着る服の形は変わるが、皆舞台を通して同じ色の服を着用している。しかし、ルチアだけは例外で場面によって身につける色を変化させている。これがこの舞台演出における重要なポイントである。

では、どのような場面でルチアは身につける色を変えるのか。最初の変化は泉の前でエドガルドと密会した時に起こる。この時、ルチアは自分の家の色である青色の布を持っていたが、エドガルドが来たことを確認するとそれを地面に置いている。これはエドガルドといる時にはアストン家の娘としてではなく一人の女として接しているという証である。しかし話が進み、エドガルドが復讐の話を始めると、アストン家の人間として話を聞かなければならず、先程の青色の布を拾い上げている。そして、エドガルドが決心し結婚を誓い合う場面では、レーヴェンスウッド家に嫁入りするという意味で赤色の布の上で愛を誓うのである。

その他にはアルトゥーロ卿が城にやってきた場面が挙げられる。今までは花の刺繍が入っており完全に白ではなかった衣装が、この時には純白のドレスをまとっている。白色が家の色となっているアルトゥーロ卿との結婚をルチアが決意したことの表れである。

このようにルチアの服はルチアの心に対応して変化している。さらに詳しく言うならば、ルチアの服はその場面でルチアがどの家の人間に心を傾けているのかを示しているといえる。ルチアだけは特別に、場面によってエンリーコ・エドガルド・アルトゥーロの3人に意識を向けているので、その衣装も他の人と違い、場面によって変化しているのである。

この論理でいけばルチア狂乱の場面での返り血にも説明がつく。エンリーコの毘によってエドガルドに失望したルチアはその身を白色に包んだ。しかし、エドガルド本人の登場により、エンリーコから渡された手紙は偽者であったと分かり、心は再びエドガルドに傾いた。本来ここでルチアは赤色の服装になるはずなのだが、現在ルチアが身にまとっているのはアルトゥーロ卿の白い服である。この服をエドガルド色の赤色にするためにルチアはアルトゥーロ卿を殺し、その返り血を使ったのである。このとき、

¹ 歌劇「ルチア」(ドニゼッティ作曲)

1996年9月26日 フィレンツェ歌劇場来日公演
演出: グレアム・ヴィック

ルチアの服のみならず、後ろのヒースの原も第1部の青色から赤色に変化しており、舞台上の色彩の変化をより大きなものになっている。

しかし、ここでヒースとは裏腹に、第1部から何も変化していない存在に気づく。それがバックに出ている月である。これは一体何故なのか。この月は白色をしているが、別段アルトゥーロ卿と関係があるようには思えない。とすれば、この月は所属とは関係のないもっと別なものを表しているのではないかと考えられる。

DVDの第1部と第2部の間で指揮者のスピン・メータが「月が（中略）正気を失ったルチアの心を侵食していく」と言っていることから、月がルチアの心と何かの関係にあることがわかる。ここで月が出てくる場面を挙げてみると、第1部のヒースの原の場面、第2部のエンリーコに説得される場面、そしてルチア狂乱の場面の3つである。ポイントはエンリーコが偽の手紙をルチアに見せた後、狂乱の場面まで月が出てこないことである。エンリーコからの手紙を受け取った際にルチアの心に起こった変化、これについて考えたときに真っ先に浮かんだのが「エドガルドへの思い入れ」であった。月がエドガルドへの思い入れであると仮定して舞台を見てみると、確かにルチアが狂ってからは始終バックに月が出ており、また、泉の場面ではエドガルドが現れてから月が大きくなっている。よって、月はルチアの中の「エドガルドへの思い入れ」の度合いを表すもの（最後の狂乱を考えると「狂い度合い」ともいえるかもしれない）であり、唯一つ所属とは離れた異質なものであるといえる。（2067文字）